

新着案内

町田の文学

第 47 号 2020.11.1 発行 町田市民文学館ことばらんど



ことばらんどお宝紹介第二弾

三島由紀夫

未発表資料初公開

当館では、二〇一九年度冬季展覧会として「三島由紀夫展―「肉体」という second language―」を開催し、その会期中途から、当館に寄贈された三島の未発表資料を初公開する予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休館により実現できなかったため、このたび「ことばらんどお宝紹介」第一二弾として展示することとなりました。

その資料とは、三島から小島智雄に宛てた書簡と色紙、そして三島邸で写された二枚のスナップ写真の計四点。小島智雄は日本大学拳闘部監督を務め、三島のボクシングのコーチを務めた人物です。生前、原町田五丁目に住んでいたという縁で、ご遺族から当館に資料をご寄贈いただきました。

本稿では、その資料についてご紹介します。

三島から小島智雄宛の書簡（表書き）



【翻刻】

この間は試合にお招き下さつてありがとうございました。お待ちしてゐましたが、お出でがなく、そのために石橋君は負けてしまいました。石橋君が素晴らしい試合だったと思ひます。後半はたしかに石橋君が相手を自分のペースに引き入れてゐましたが、第一、二ラウンドあたりで、慎重に過ぎてセーヴしすぎたのが、敗因だと思ひます。ほんの僅差だったと思ひますが、しかし残念でした。控室で石橋君と会つた時、新築祝をいただいたお礼を言ふのを忘れました。お会ひになつた時、どうか感謝してゐる旨お伝へ下さい。



形態：はがき、ペン書き
発信者：三島由紀夫
受信者：小島智雄
日付：7月12日（消印
昭和34年7月13日）

憧れのボクシング

昭和三〇年に肉体改造に目覚めた三島は、翌年九月、三一歳の時に、ボディビルのコーチだった鈴木智雄から小島を紹介してもらい、若いころから憧れていたボクシングを始めます。小島から出た入門の条件は、「決して試合に出たがらぬこと」。試合に出て怪我をされたら、ボクシングに傷がつくとの理由からだったそうです。

しかし、試合に出る以前に、三十路を迎えるまで虚弱体質でスポーツに縁がなかった人



右端が小島氏、中央が三島の父・平岡梓

がする競技としては、ボクシングは厳しすぎるものでした。始めて一年足らずの頃、小島を相手にスパーリングをしているところに訪れた石原慎太郎が、その様子を八ミリビデオで撮影しています。その映像を客観的に見た三島は自分の哀れな姿に自信を喪失、体力の限界を意識し、それ以降ボクシングを続けることを断念してしまいました。ただし、その後もボクシング熱が冷めることはなく、しばしば試合を観に行き、多くの優れた観戦記を残しています。

新事実としてのボクシング観戦

この書簡も正にプロの試合を観戦した機会に書かれたもので、招待者でありながら当日来られなかった小島に対して、対戦の様子を伝える内容となっています。「石橋君」とあるのは、第一三代日本バンタム級王座のタイトルを獲得し、五度の防衛を果たした石橋広次（1931-2002）のこと。小島の門下生で、頭脳派ボクサーとして人気を博しました。

「プロレス&ボクシング」第五巻第一〇号によると、石橋は一九五九年七月六日、新宿にあった東京スケートリンクで矢尾板貞雄と対戦し、一〇回戦で判定負けを喫しています。同誌掲載の郡司信夫の観戦記によれば、「この試合で、石橋が矢尾板に勝てば、ウェイトをフライ級に上げて、世界フライ級チャンピオン、パスカル・

ペレスの挑戦者に仕立てるといううさわ」があったらしく、注目されていた試合だったそうです。

なお、同年九月に刊行された『鏡子の家』に登場するボクサー・深井峻吉は、石橋をモデルに描かれたと言われています。本作は、『金閣寺』で作家としての地位を確立した三島が次に執筆した長編小説で、ニヒリズムに覆われた同時代の東京を舞台に、三島の分身ともいえる四人の青年の生き様を描いた意欲作でした。脱稿した六月二九日には疲労と昂奮で眠れなかったそうですが、石橋の試合を観に行ったのは、そのわずか一週間後のこと。『決定版三島由紀夫全集』第四二巻（二〇〇五年 新潮社）掲載の年譜にはこの日の行動が記載されており、三島がこの試合を観戦したことは本資料で初めて判明しました。

書簡には石橋から「新築祝」をもらったとありますが、三島は前年六月に結婚し、この年五月に大田区南馬込に建てた新居に越したばかりでした。六月には長女が誕生するなど、私生活に大きな変化が訪れた時期です。新居はヴィクトリア朝風コロニアル様式の瀟洒な建物で、庭にはアポロ像が設置されていました。

今回ご寄贈いただいた二枚の写真は、時期は定かではありませんが、小島がその三島邸を訪れた際に撮影されたもの。三島のカジュアルな服装から、小島との親交の深さが窺える資料です。

追悼

多田茂治氏

作家の多田茂治先生が今年五月三日にご逝去されました。町田市民文学館開館以来、多田先生には様々ご尽力をいただきました。

多田先生は一九二八年三月二七日、福岡県小郡市に生まれました。旧制福岡高等学校在学中から小説を書き始め、九州大学在学中に「九州文学」「新日本文学会」などの同人誌に作品を発表。大学卒業後は福岡で新聞記者となり、この頃、夢野久作の三男・杉山参録と知り合い夢野久作に関心を持ち始めたといえます。その後上京し、編集者・フリーライターを経て、五一歳の時に町田ゆかりの明治の民権家・石坂昌孝や細野喜代四郎などを描いた『多摩困民記』を刊行し作家デビューを果たしました。「自分の書き残したいものだけを書く」という強い決意のもと、綿密な調査と取材に基づき優れたノンフィクションや伝記を執筆。昭和史や自らの信念を貫いて生きた人々を描き続けました。一九九七年に『夢野一族』を刊行。ご



多田茂治（1928～2020）作家。享年92。著作は紹介されたもののほか多数あり、図書館、当館に所蔵。

遺族の信頼を得るまで根気強く通い続け、取材には四年余りを費やしたといえます。その後、二〇〇三年に『夢野久作読本』を刊行し、この作品で第五七回日本推作家協会賞（評論その他の部門）を受賞しました。選考委員の一人、井上ひさし氏は本書について「第一級の評伝。とにかくおもしろい」と評しています。町田には『多摩困民記』取材のため初めて訪れ、これがきっかけとなり一九八三年に転入。亡くなるまでを過ごされました。

当館との関わりとしては、開館の翌年の二〇〇七年に「我が文学、歴史と人間へのまなざし」と題してご講演をいただいたほか、〇九年春季企画展「まちだ作家博覧会展」にて現役作家一四名のうちのお一人としてご紹介させていただきました。本展では『夢野久作読本』の関連資料を中心に、原稿や取材ノート、日本推理作家協会賞等の貴重な資料をご提供いただきました。また、二〇一一年四月から一三年三月まで、町田市民文学館運営協議会の会長として当館の活動を支えてくださいました。

お元気な頃は散歩の足をのびして、しばしば展覧会を見に立ち寄られ、励ましの言葉をかけてくださったのが懐かしく思い出されます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（学芸員 神林由貴子）

【翻刻】

拳闘の
友どち集ひ
夜長かな

為小島先生
三島由紀夫

色紙には、墨書で俳句が書かれています。三島は、初等科から高等科まで通っていた学習院時代、俳句や短歌など短詩形の作品を多く残していますが、大人になってからは詩作とは距離を置いています。ただし、全く詠まなくなったわけではなく、鉢の木会などの集いの折には句を書き連ねていました。本資料も同じように、ボクシング仲間と集まって楽しい時間を過ごした折に詠んだのでしょうか。「夜長」は秋の季語ですが、前出の写真の服装から、あるいはこの日に揮毫したものかもしれません。

本資料の展示は、一月三日から二月二七日まで。会期中の一二月二五日に、三島由紀夫は没後五〇年の節目を迎えます。この機会にぜひ、三島作品を手にとってみてはいかがでしょうか。

（学芸員 杉本佳奈）

注記 本稿に掲載していた資料写真については、著作権継承者から許可を得た掲載期間を経過したため削除しました。

新刊紹介

『豊旗雲 秋山佐和子歌集』

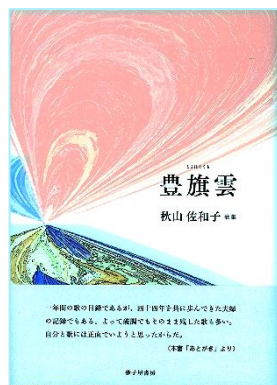
秋山佐和子／著 砂子屋書房 2020.5

秋山佐和子

1947年山梨市生まれ。岡野弘彦氏に師事。2002年「玉ゆらの会」結成、主宰となる。03年『歌ひつくさばゆるされむかも 歌人三ヶ島蓼子の生涯』で第1回日本歌人クラブ評論賞受賞。12年歌人原阿佐緒と三ヶ島蓼子の研究で第8回平塚らいてう賞を受賞。

二〇一三年から一四年の四五
八首をまとめた著者の第八歌
集。歌は、帰宅した夫から癌であ
ること、残された半年か一年間
をできるかぎり仕事を続けたい
と告げられた夜から始まる。「歌
は訴えである、と言われるがま
さにそのとおりの一年だった。
三十一音の調べに思いを述べる
とき、心が幾度も立ち直り歌の
力と深い恩寵を感じた」（「あと
がき」より）。

魂の在処を共にたどるような
歌集である。



『神蔵器の俳句世界』

南うみを／著 ウエップ 2020.7

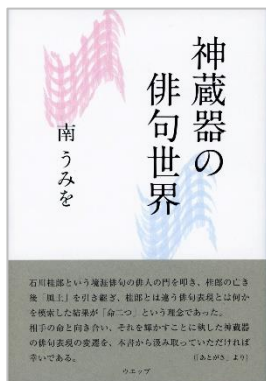
南うみを

1951年鹿児島生まれ。俳人。89年「風土」入会。2016年主宰を継承。

神蔵器

(1927-2017)
町田出身の俳人。47年石川桂郎に師事。62年より桂郎主宰の「風土」所属。79年より主宰を務めた。

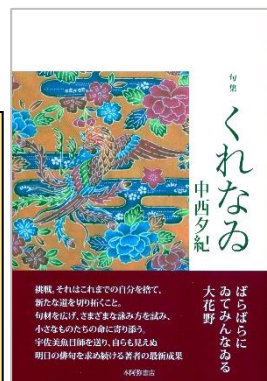
「命二つ」を座右の銘とした師神蔵器の俳句表現の変遷を、桂郎との出会いの時代から最後の境地まで丹念にたどり、「自在な発想と軽やかさ」が「器の最後の俳句世界であり」「吾の魂」を浄化することで「相手の魂」と自在にひびき合う道へ転換していった」とする結論に至る。優れた神蔵器論。



著者の第四句集。一九八〇年に宮坂静生のもとで俳句を始め、以後藤田湘子、宇佐美魚目に師事。本書には二〇一二年からの句が収められている。「日の没りし後のくれなる冬の山」。書名はこの雄大な句から。

中西夕紀

1953年東京生まれ。俳人。「岳」「鷹」「晨」に参加し、2008年町田市で「都市」創刊主宰。町田市在住。



【主な寄贈定期刊行物】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」

詩 誌：「璞（あらたま）」「構図」

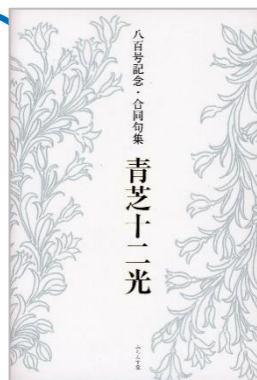
短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「訝（こだま）」

「都市」「風土」「波」「八千草」「暦日」

その他：「多摩のあゆみ」「隣人」



『八百号記念・合同句集 青芝十二光』
青芝会員 100名の合同句集。
2020.7 ふらんす堂

新刊紹介

『露草ハウス』

有働薫／著 思潮社 2020. 8

有働薫

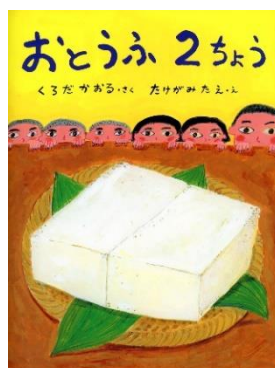
1939 年生まれ。詩人、翻訳者。詩集『幻影の足』（思潮社・2010 年）で第 28 回現代詩花椿賞受賞。町田市在住。



「人は完成して死なない、途中で命が尽きるものだ。音楽はそのことをわすれさせてくれる。言葉もそういうふうでありたい。」「音楽は感情よりずっと規模が大きく、音楽は言葉を超えて存在する。」

『おとうふ 2 ちょう』 くらだかおる／作 たけがみたえ／え ポプラ社 2020. 9

お母さんに「おとうふ、もう一ちよう買ってきて」と頼まれたケンちゃん。友だちと遊びたいばかりに「おもたすぎて もてないよ」と嘘をついたら・・・大変なことになった！ 奇想天外なお話を、力強い絵が、一層笑わせてくれる。ド迫力のお豆腐料理。私たちもワシワシ食べよう！



たけがみたえ 1986 年生まれ。絵本作家。幼稚園から大学まで和光学園に通う。町田ゆかりの作家。2013 年熊谷守一大賞入選。絵本作品は『きょうは泣き虫』『うみのあじ』『だんだんだんだん』など多数。

『今、もえる理由。ー全日本のエースが語る、わたしとバレーボールの熱き 50 年ー』

白井貴子 山崎玲／著 愛育出版 2019. 4

一九七六年のモントリオール五輪、バレーボール日本女子チームのキャプテンであり、金メダルストでもある白井貴子氏に、その波乱万丈のバレー人生を、山崎氏がインタビュ。人気を博したエースの横顔が今、浮き彫りにされる。



山崎玲 1957 年生まれ。TBS でバラエティや情報番組の制作をはじめ現場周辺業務に関わる。2017 年定年退職。町田市在住。本作は当館閲覧室で執筆されたもの。

『たまがわがくえん動植物さんぽ』

村山尚子／著 玉川学園町内会 2020. 9

『玉川学園町内会だより』に二〇一六年から連載されたエッセイをまとめたもの。身近な自然に目を凝らせば、こんなにも豊かな毎日が！著者独自の視点が面白い。「えびね苑」は「日本一ひかえめな花畑」、マンジュシヤゲには「のち、猫のソファ」と付け加えたいと言う。なぜか、は読んでもの楽しみ。

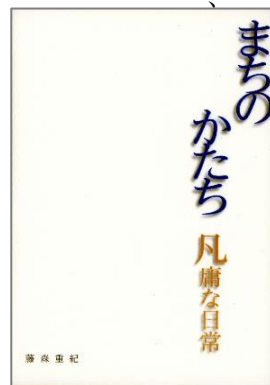


村山尚子 玉川学園生まれ、玉川学園育ち。文筆、イラスト、デザイン、作詞、作曲、振付、写真、アニメ制作なども手がける。町田市在住。

『まちのかたち 凡庸な日常』

藤森重紀／著 龍工房 2020. 6

黄昏前、詩人は長椅子に座り、郷里の FM アプリを聞きながら夕闇があたりを包むのを待つ。いつしか眠ってしまったりもする。「灯りも点けず薄暮の部屋に独りいる光景は寂寥の極みかもしれないが、(中略) 谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」的な至福のひとつときである。こうして詩が生まれる。



藤森重紀 1944 年岩手県一関市生まれ。山本健吉、大岡信に学ぶ。横浜詩人会、岩手県詩人クラブ会員。町田市在住。

「貴重雑誌をめぐる物語」

その七

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八八〇タイトル、一万一千冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

作詞家・宮川哲夫旧蔵の歌謡雑誌

「新歌謡界」②



新歌謡界 創刊号
1952(昭和27)年7月

前回に続き、昭和歌謡史に大きな足跡を残した、当館所蔵の同人誌「新歌謡界」から、町田ゆかりの作詞家、宮川哲夫のエピソードをご紹介します。

作詞家を目指す日々

一九五三(昭和二八)年三月の第六号に、宮城県在住の同人・横山賢一が、町田の宮川家を訪ねた折の様子が載っています。

「(二月)十三日、…小田急で新原町田へ向った。信頼し、敬愛するライバル、宮川哲夫兄訪問のためである。省線を下車して、バスに揺

れること廿分、木曾の『やまとや』の旧家にノックリ現はれた僕。…世田谷小学校に勤めておられる宮川兄は夕刻帰宅。十年来の知己の如く、酒杯を交はし、制作欲の旺盛な、兄の試作品やコピーを見せて頂だき、談論風発、スゲエ詩論、恋愛論を拝聴した。…古い『若草』や『ロー人形』(筆者注…西条八十主宰の詩誌『蠟人形』に載っている宮川兄の純粹詩や小曲の数々、近江敏郎歌う所の、兄作詞上原げんと先生曲の『哀愁の港町』のレコード。…想い出しても愉しい話題に満ちたひとときであった。寝たのは、確か二時頃だったろう。」当時宮川は、すでに忠生小学校から、世田谷の小学校へ転任していました。

ビクターの専属作詞家に

一九五四(昭和二九)年四月の「新歌謡界」第一三号、主宰の石本美由紀による連載随筆(東京から横浜から)には、宮川がビクターの専属作詞家になった日のことが、感慨深く綴られています。

「宮川哲夫君がビクターの専属作詞家になりました。今月契約したのです。嬉し涙がこぼれて来そうです。十三日の午後、宮川君が私を文芸部に訪ねて来て呉れました。喫茶店ブルボンで、二時間ばかり、コーヒーの冷めるのも忘れて語り合

ました。／その時、上原げんと先生も、丁度ブルボンに來られ宮川君のことを私が伝えたら、大変喜んでくれました。そして激励の言葉を宮川君に寄せてくれたのです。／上原先生と、お別れして後二人は新橋に足向け、酒場の片隅に腰を下ろしました。／呑むほどに、益々感激はつくり、また話は弾み、仕事の話は勿論のこと、田舎の話や、過去の思い出話にも花を咲かせました。／腕時計をみると、午後七時半、それから宮川君のすゝめにより、今度は新宿までハイヤーで飛ばしました。…／これからは、歌一筋の作詩家生活なので、本当の苦労は、これから始まる訳ですが、必ずや試練に堪えて、成長へのコースを、前進するであろうことを私は信じて居ます。…」

五四年一月、宮川哲夫三二歳。この年三月に、小学校教員を退職しています。

宮川哲夫の〈歌謡時評〉

「新歌謡界」にはまた、〈歌謡時評〉という同人持ち回りの連載があり、一九五二(昭和二七)年一二月の第四号に、宮川は「流行歌はこれでよいか」という一文を寄せています。

「『流行歌は詩ではない』と、教えてくれる人もいます。『いや、流行歌も立派に詩でなくてはならない』と、強い言葉で言う人もいます。…唯今の私の態度、考え方は、この二つの言葉の間を、右に左に往復します。もう少し言葉を進めましょう。売れる唄が作りたいのです。みんなが唄ってくれる唄を作りたいのです。大衆に媚びているのであり、大衆の水準に、自分自身を近づけようと、努めてしまう結果になります。霧と



宮川哲夫（1922～1974）作詞家。東京都大島生まれ。忠生村木曾（現・町田市木曾町）に住まい、8年間を過ごした。

多彩な才能を輩出

雨と、ネオンの灯り、それが大衆の好みであるならば、私自身の作るものも、そのまゝ、霧と、ネオンと、雨に自然落着いてしまします。或いは、この辺に《乞食節》（筆者注：仏文学者の辰野隆が戦後すぐにある雑誌に書いたという「流行歌は乞食節だ」を指す）の生まれてくる所以があるのかもしれない。それでは、結局、流行歌に、趣味の高い詩を求める必要はないではないか、という事にもなりそうですが、そのくせ、私の心の何処かでは、そうではないと、いう声もします。／作詩家も矢張り詩人であり、流行歌も亦、詩人の作品であるならば、それは当然、詩でなくてはならぬ筈だと思ふのです。」

ここには終生、詩人と流行歌の作詞家との間で悩み、揺れ動いていた宮川らしい、純な心情が吐露されています。

一九五二（昭和二七）年七月に創刊された「新歌謡界」は、その後八二（昭和五七）年八月の第一七一号まで、実に三〇年もの長きにわたって発行され続けます。その間、昭和の歌謡史を彩る多彩な才能を、数多く世に送り出しました。中でも後年、「三百六十五歩のマーチ」（水前寺清子）、

「アンコ椿は恋の花」（都はるみ）、「男はつらいよ」（渥美清）、「なみだ船」（北島三郎）など、代表作だけでも十指に余る作品を残した星野哲郎を忘れることはできません。彼は、五二（昭和二七）年に雑誌「平凡」の懸賞に応募した「チャイナの波止場」が入選し、選者の石本の勧めで「新歌謡界」に入会します。五六（昭和三一）年四月、郷里の山口県から初めて上京した折の宮川との出会いを、同年九月の第二五号「東京巡禮記」で次のように回想しています。

「二十二日は横浜にて『新歌謡界』の詩話会でした。参加者はビク社の宮川哲夫先生、松井、沼、大桑、山北、加藤、荒川の諸兄……私にとつては全部初対面、少しく固くなっておりまして。こうした時、酒は誠に気の利いたボードビリヤンで、先づ宮川先生が極めて特徴のある話法で次第に雄弁になってゆかれました。『白い花がほろほろ散ってゆくのが恋ですよ』と云つて皆を微笑させた先生は、『歌は魂で書くのです、君は魂で書いてますか、いないでしょう？』と私の肺腑をえぐりつけたものです。」

星野哲郎は、その後次第に頭角を現し、九六（平成八）年には石本の後を継いで、日本作詩家協会の会長にもなります。

惜しまれる早世

それにしても、一九七四（昭和四九）年、膵臓癌のため五二歳で亡くなった宮川の、早すぎる死が惜しまれます。二〇〇九（平成二二）年の石本美由起、一〇（平成二二）年の星野哲郎と、ともに八五歳まで生きたふたりは、生前、紫綬褒章

と勲三等瑞宝章の榮に浴しています。そうした彼らに比べて、宮川が残した業績は勝るとも、決して劣るものではありません。しかし、市井の名もなき人びとを歌い続け、先の《歌謡時評》の後段で、次のように書く宮川には、むしろそんな褒章など無用のものだったのかもしれない。

「然し流行歌が、社会のある特殊な大家だけの所有ではなく、オフィスに通うお嬢さんも、希望に溢れる若い真面目な学生も、極めて地味なサラリーマンも、赤ちゃんを背負った奥さんも、波止場で働くマドロスも、一様に声を揃えて唄えるもの——而も楽しく、魅力あるもの——それが流行歌の定義となつた時、流行歌は、決していやしい乞食節ではなくなる時であると思います。：作詩家ではあるが、詩人ではないなど、卑下した感情で唄をつづることを止め、大衆の詩人としての誇を充分に持つて詩を作る時があつてもいい様な気が致します。大衆と共に唄ひ、大衆の中にあり乍ら、大衆を向上させる詩人、それが、流行歌の作詩家でありたいと思ふのです。」

宮川哲夫の生涯と業績については、翻訳家・作家であり、町田市民でもある辻由美氏の好著『街のサンドイッチマン——作詞家宮川哲夫の夢』（筑摩書房・二〇〇五年）があります。

（当館元館長 守谷信二）



『街のサンドイッチマン 作詞家宮川哲夫の夢』辻由美／著 筑摩書房 2005.9

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006 年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

文学サロンミニ展示今後の予定

(原稿・原画保護など諸般の事情により
変更される場合もあります)

●三島由紀夫未発表資料初公開

公開中 12/27(日)まで

★追悼 大林宣彦 (仮)

収蔵品のお宝展示ではありません

2021・1/5～2/14

●石川桂郎 (仮)

2021・2/16～3/28



ことくん
©中垣ゆたか



らんちゃん
©中垣ゆたか

市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。

また、勝手ながら、貸出用と保存用の2冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。



「町田の文学」のバックナンバーは町田市民文学館HP（文学館からのお知らせ）で
ご覧いただくことができます。

「町田の文学」第47号 2020年11月1日発行

編集・発行／町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida_kotoba



*この冊子は500部作成し、1部あたりの単価は125円です（職員の人件費を含みます）